

松江城下町遺跡 (母衣町 115) 発掘調査現地説明会資料

平成 28 年 11 月 3 日
松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

1. はじめに

本調査地は中国電力株式会社の附属建物新築工事に伴い、平成 28 年 8 月から実施している松江城下町遺跡の発掘調査になります。

2. 絵図で見る調査地の様子

調査地は藩主が堀尾氏であったころ (1633 年まで)、堀尾氏の重臣のなかでも No.2 の石高を誇る「堀尾因幡」の屋敷地にあたります。当時、調査地南側に流れる大橋川の東端には、6500 石を拝領し鉄炮 50 人を預かる重臣で、石高 No.1 の「堀尾修理」の屋敷地が、その西側にあたるこの調査地では 4900 石を拝領し鉄炮 60 人を預かる「堀尾因幡」が屋敷地を構えており、松江城下町の南側を信頼する重臣で強固に守ろうとしたことがうかがえます。

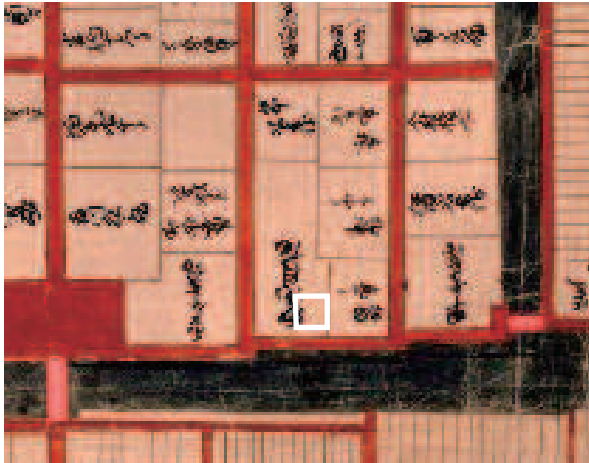
その後、藩主が京極氏であったころ (1634 ~ 1637 年) は 1035 石を拝領していた「小足掃部」の屋敷地が、松平氏の頃は江戸時代中ごろから後期にかけて「唐人屋敷」がおかれていたことがわかっています。

今回主にご紹介するのは、この「堀尾因幡」屋敷の礎石建物跡、屋敷境の溝跡になります。

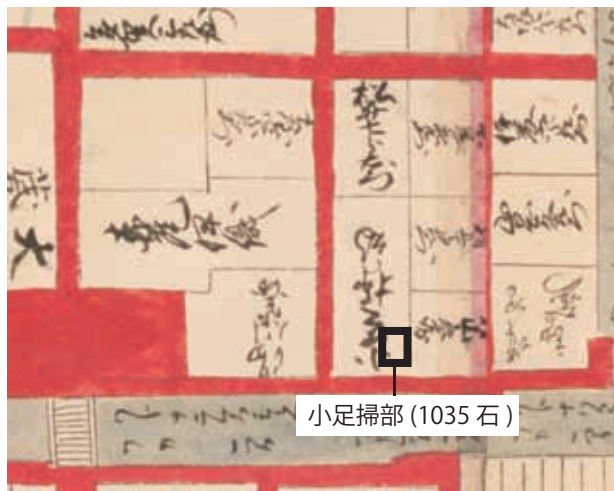
*「唐人屋敷」とは、藩内に朝鮮半島や中国大陆から漂着した人々を一時的に保護する施設のことで、その後、長崎に送られた記録が残っています。



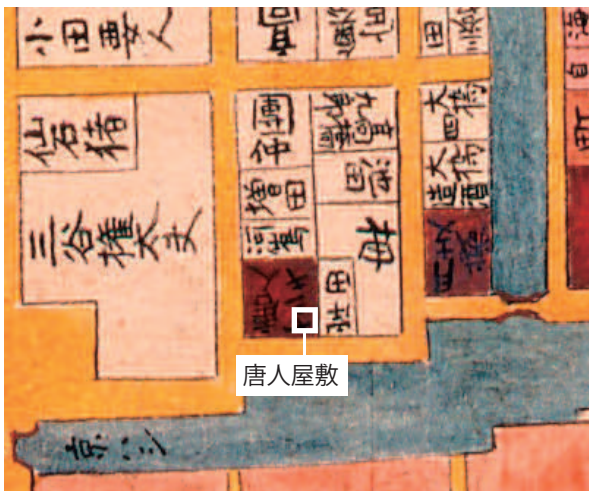
堀尾期松江城下町絵図 (島根大学附属図書館蔵)



拡大図 * 白枠内が今回の調査地



京極期絵図 (「寛永年間松江城家敷町之図」丸亀市立資料館蔵)



松平期松江城下町絵図 (島根大学附属図書館蔵)
* 江戸時代後期 (19 世紀代)

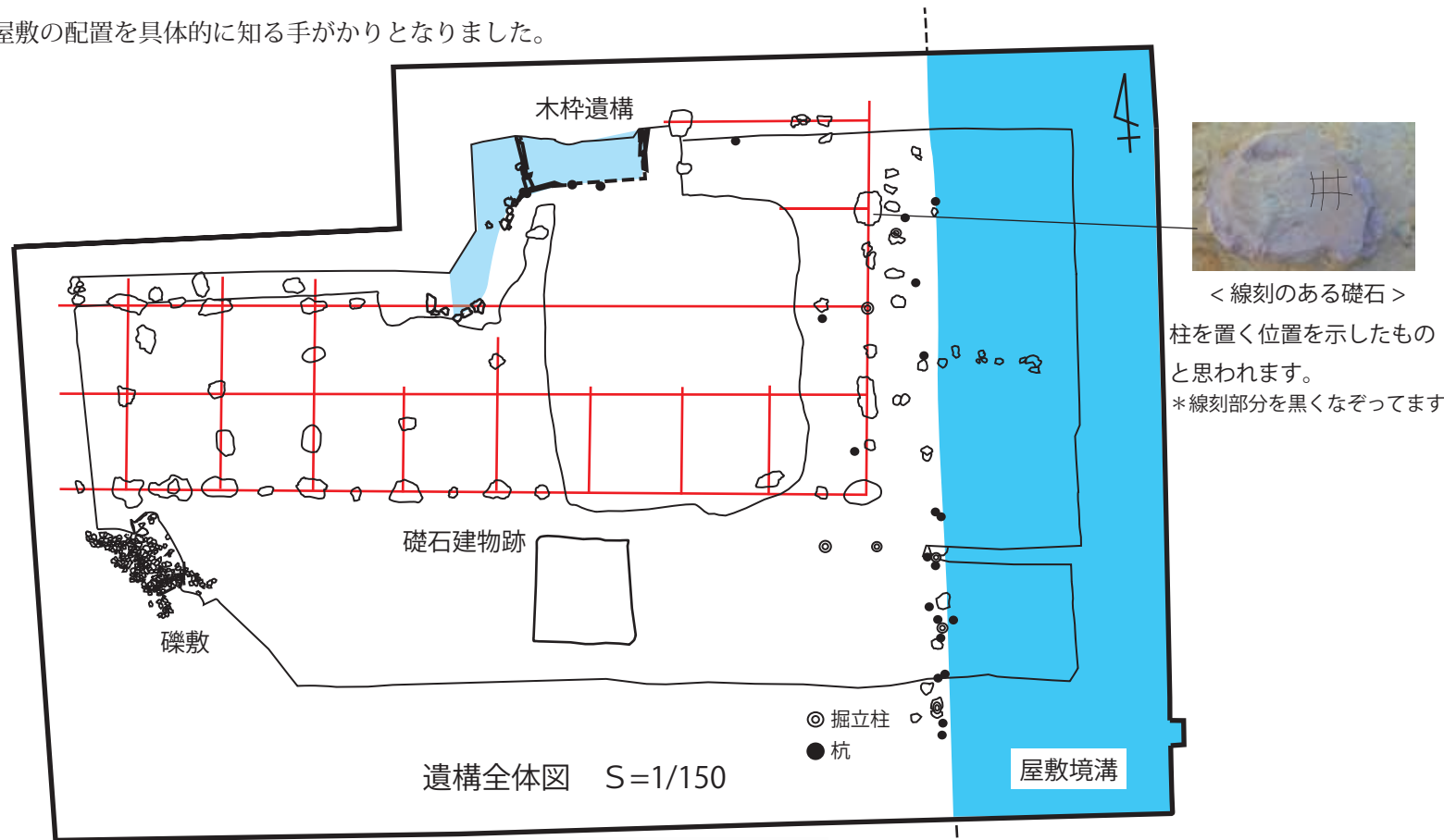
3. 発掘調査の成果

屋敷地の表向きにあたる場所で、礎石建物跡が見つかり、規模は東西 9 間 (18m) 以上、南北 4 間 (8m) 以上が推定できます。

調査では庭園に伴う礫敷や木柵遺構も見つかっており、建物の建て替えにより屋敷の配置も替わっていったことが考えられます。

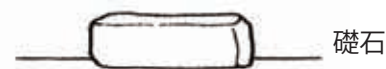
また、確認できた屋敷境溝の幅は約 5m ですが、過去の調査成果を勘案するとおよそ 20m もの規模が想定されます。溝の縁からは堀の基礎と考えられる礎板石と柱を伴う掘立柱穴も確認しています。

松江城下町での屋敷配置が分かる絵図は江戸時代後半のものしか残っていますが、堀尾氏、京極氏が統治した江戸時代前半の屋敷配置図は今のところ見つかっていません。調査で建物跡を発見したことで、文献や絵図などに残されていない江戸時代前半の武家屋敷の配置を具体的に知る手がかりとなりました。



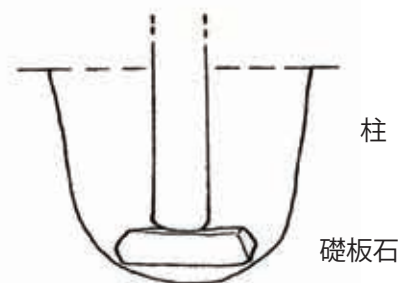
●さまざまな建物の基礎構造例

礎石の上に柱がおかれます。



<礎石>

*「因幡」屋敷では建物には礎石が、堀には掘立柱が使用されています。



<掘立柱>



参考写真：松江歴史館調査で発見されたもの

<ぐりいし 栗石を敷いた礎石>

*唐人屋敷で用いられた構造
礎石は失われた状態で発見しました。